

〔翻訳〕

フォーカスグループを用いた研究の実践マニュアル（その8）*

ーフォーカスグループの結果分析ー

Richard A. Krueger & Mary Anne Casey 著

今村裕紀子 藤原 大樹

和泉とみ代 橋本由紀子 訳**

1. フォーカスグループ結果の分析

データ分析について次のような記述がある。データ分析とは、検討し、分類し、表にし、また、さもないければ論拠を当初の研究命題に再結合させることからなっている（ユン、1984年、99頁）。

次のような例はデータ分析ではない。かつて、大学設置準備室が新しい学長を雇おうとした。準備室の委員会はいたるところからの申し込みを求めている。しかし、交通費に制限があった為に、近隣の申し込みにしぼって検討した。3人の教授が委員会によって面接最終候補者となった。一人目は会計学教授、二人目は土木工学の教授、三人目は経営コンサルタントを勤める教授であった。全ての面接が終了した後、委員会は行き詰まった。ディレンマを解消しようと、3人の教授に1つの最終問題の答えを返すように求めることに決めた。

最初に、会計学教授が「2+2は何ですか？」と尋ねられた。教授はすぐさま「自信をもって、その答えはちょうど4である」と返事をした。次に、土木工学

* 本章はフォーカスグループを実施しその中で得られた結果をどのように分析するのか、分析のための戦略について述べられている。原著はFOCUS GROUPS A PRACTICAL GUIDE FOR APPLIED RESEARCH, Sage Publications, 2000である。

** Yukiko IMAMURA 大阪医療技術学園専門学校講師, Taiki FUJIWARA 大阪保健福祉専門学校講師, Tomiyo IZUMI 香川短期大学教授, Yukiko HASHIMOTO 吉備国際大学教授。

教授が「 $2 + 2$ は何ですか？」と尋ねられた。じっくりと考えた後、技術者である教授は「技術者の世界ではそのような問題に慣れている。技術者の中で私たちはしばしば完全な数値で論じなければならない。それゆえに最初の2は1.5～2.49間のどの数字でもあることができ、同じ事は2番目の数でも違いない。これは $2 + 2$ の合計は3.00～4.98間の全ての数字であるということを意味している」と返事をした。最後に、委員会は、経営コンサルタントをしている教授を会議室に呼んだ。そして「 $2 + 2$ は？」と質問した。コンサルタントはゆっくり立ち上がり、ドアを閉め、ブラインドを下ろすために窓に向かい、ようやく机に戻ってきた。そして、机に寄りかかり、小さな声で「何を望んでいるのですか？」と囁いた。

質的分析は、あなたが導き出したいことを導き出すことではない。しかし残念ながらそういう考え方がある。本章のねらいは、フォーカスグループの分析は実用的で、体系的で、実証的であるという全体像を提示することにある。質的調査では分析は困難である。そして、膨大な量のデータに圧倒され、分析の複雑さが調査者の冷静さを失わせるのである。

2. 目的が明確であればよい分析ができる

分析は研究しようという意欲によってはじまる。研究者は分析過程の始めから終わりまで、研究目的を覚えておくべきである。質的研究の調査者はおびただしいデータの量に圧倒され、沢山の選択肢があるということを発見する。鍵となる原理は、分析の深さや焦点は研究目的で決まるということである。研究目的が狭ければ、手の込んだ分析は不必要かつ不適切となる。データの量と明らかにしたい問題の深さが合わない、質的・量的分析はともに困難が生じる。このことは平凡なデータを念入りに分析しすぎたり、重大な関心事であり複雑な問題点なのに十分な分析をしていなかったり、という結果につながる。調査者は、研究の目的やねらいを理解し、情報量とそこから得られる新情報の価値とのどちらが優先されるべきかを選択しなければならない。どちらかということ、フォーカスグループ分析の始まりは迷路の入口に立っているようなものである。はじめは難なく通過できるが、旅の途中で絶え間なく余分な道や多くの選択肢が現れる。

旅行者がその道が目的地に近いかどうか知らなければ、すぐ角を曲がったとこ

ろが目的地であっても、途中で疲れてしまうかもしれない。生き残るためには、研究目的をはっきりと設定することが必要である。

（背景）何事も目的が大切

この章は分析についてであり、このテーマを理解したかどうかを知りたいのである。私たちは目的に向かって進んでいる。それは、目的が軌道を保つからである。もし全過程を明確にしたいなら、より効果的に必要な情報を集めることである。目的は、全てに影響する。目的は、計画も思い通りに動かす。そして研究でどれくらいの時間や資源を研究につぎ込まなければならないかを示す。どのようなタイプの人に参加してもらわなければならないのか手がかりをもたらす。質問項目作成がうまくできる。コーディネーターにとって何が焦点かを知るのを助ける。そして分析者にとっても何が焦点か知るのを助ける。調査初心者は、時々研究から学んだ全てのさまざまな違うことやフォーカスグループで話されたこと、迷い魅せられたことに躍起になる。目的に焦点をあてることは異なることを認めないことではない。私たちは常に寛容でオープンである。しかし、目的の背景の中に何かを見出そうとすると、それを明らかにする価値を優先する。

3. 分析を理解する

フォーカスグループ分析は体系的で、順序だてられるもので、実証でき、継続的なものである。

分析は体系的で、順序立てられているものである

体系的な分析はじっくりと考え抜かれ、計画されており、気まぐれで、勝手に、無意識的なものではない。分析は順序立てられているものであり、プロセスを発展させる。体系的で、順序的な分析の手順は、結果がグループの中でよく理解できるようにするために役立つ。私たちは、間違いを避け、重要な要素を見のがさないように体系的調査計画案を立案しなければならない。体系的な分析は、詳細に記録したり、理解したり、調査チームの各々の構成員にできることを明確にする。あなたは「どのようにしてそれを考えたのですか」という質問に対し、証拠

の手掛かりをすぐに示すことができる。プロセスは開示され自由に検証されるべきである。

分析は実証できるものである

他の調査者は、利用できる記録やデータを使い、同様の結果に辿り着く。人は既に同意を得ている考え方を支持し、不協和音を引き起こしたり、理解しがたい情報を扱うことを避ける傾向にある。教育歴、背景、経験によって、何に気付き、何に注意するかは異なる。調査者は、人のそのような特定の認識を選びがちな傾向に注意しなければならない。分析の実証は、重要な安全装置である。分析を実証するためには、証拠の手がかりを構成するための十分なデータがなければならない。データの流れは、フィールドノートの作成から始まり、フォーカスグループの録音をし、各々のグループセッションで重要点を要約し、グループセッションの後すぐに司会者達が反省会をし、手書きのメモを復習する。

分析は継続的な過程である

フォーカスグループの分析は量的分析と全く違っている。大きな違いは、分析の始めと終わりのときである。量的分析では、調査者がすべてのフォーム、調査、記録が得られるまで待つ。データが全て入手できたとき、または、少なくとも充分な量に達した時、データ入力に入る。コードが明らかにされ、生データがコンピューターに取り込まれる。データ収集は終了し、分析が始まる。収集と分析を分けるのは量的研究においては明確である。それに対して、フォーカスグループ分析はもっと早い段階から始まる。フォーカスグループ分析はデータ収集と併せて行う。それぞれのグループは最初のグループと比較され、分析される。実際、データ収集を良くすれば分析はうまくいく。最初のグループの司会者は次のグループを実施する前にテープおこしをする時間をとるようにスケジュールを考えなければならない。それから、1問ごとのやり取りを短い要約にして書く。ある質問に関してもっと情報を得る必要があることがわかる。グループ参加者が実際に質問に答えないのを見て、次のグループでそれを注意することができる。実際に、クライアントのニーズを把握するに適切でない質問を見つけ、後のグループで適応する質問を見分けることができる。方法に添った分析はコーディネーターの能

力を向上させる。

分析段階の設定をする

最初のフォーカスグループが実施される前に基礎となる土台を用意する。それはコーディネーターや分析者が研究の範囲を熟知すること、問題についての背景になるデータを獲得すること、過去の調査を探究すること、研究依頼者やスポンサーと企画を議論することから始まる。その際、フォーカスグループ参加者に求められる質について決定されてから研究計画が始まる。グループは、分析タイプを満足させるように設定されなければならない。さらに、もしあなたが、女性と男性がどのように思うのかを分析したいならば、彼らは別々のグループにしなければならない。質問項目は、分析を考慮して示されなければならない。最初のフォーカスグループが開始される前でも、コーディネーターや分析者は注意深く質問の設定を検討するのか、質問が調査の意図に沿ったもので目的を果たせるのか、良い洞察を可能にできるかを考慮する。予測される質問は、参加者がつまらないあるいは深みのない返答をしないように十分吟味し体系的に作成する。

質問の順序だてのプロセスは、グループの間ずっと続けられ、フォーカスグループの重要な部分になる。質問は、順序だてて構成され、後の参加者によるコメントは、グループのコメントを充実したものにするために追加されていく。最初の質問は、重要性は低く、分析の注意点とはあまりならない（あるいは同様な重要性がある場合もある）。戦略的に、後から重要な質問を配置し、参加者の中心的な事柄を確実にするのを助け、研究にとって特に重要である要約を明確に行う。

フォーカスグループミーティングの後、司会者と、助手、集まりを観察した調査チームのメンバーを交えて反省会をする。そして、後のフォーカスグループに続ける。この時に、コーディネーターはテープレコーダーが作動しているか、フィールドノートが完全であるか確実にすばやくチェックする。その後、コーディネーターはテープレコーダーを巻き戻し、メンバーがなにを討議しているのか聴く。つまり、話題は何か、特に役に立つ会話や言葉は何か、思いがけない発見は何か、このグループと初期のグループが同じか、又は違うのはどのような点か、次のグループの前に変える必要がある点は何か、を聴く。

さらに進行が続くが、ここからいくつかの違った進路を得られるかもしれない。

その進路については、この章の後方、「分析戦略」で述べる。

4. 分析の基礎に何を使うか

研究目的、スケジュール、予算、そしてクライアントのニーズ、データ入手の仕方の違いによって、どのような分析の基礎を使うかが決定される。つまり、手書きでの記録にするか、テープでの録音か、ノート、記憶である。

手書きの記録

手書きの記録はフォーカスグループの分析基礎としては逐語記録を使用する。そして補助として、調査者がフィールドノートをつける。フォーカスグループ討論の後、調査者とタイピストが原稿を作成するが30～50ページに及ぶ。熟練したタイピストが良い機械を使っても2時間のグループ討論を記録するには8～12時間かかる。通常、逐語記録はシングルスペースで打ち、話者が変われば1行開ける。司会者の会話は太文字で打ち、わかりやすくしておく。記録の仕方は調査者が選べる（コンピューターでのコード化やロングテーブル方式などがある）。通常、分析は、記録を読み、注釈をつけ、コード化し、分類する。記録には幅広く余白を設け、コメントや注釈を付けられるようにする。カラーペンや鋏を使って、重要部分や興味深い部分にしるしをすることもできる。そして、要約し他のグループの討論の内容と比較し、報告書を作成する。報告書は質問項目に沿って作成したり、一貫したテーマがある場合はそれに沿って作成する。

テープ録音を基礎とする要約記録

テープを基礎とした記録は、逐語記録ほど時間はかからない。フォーカスグループの録音テープを聴いて、それをもとに、関連した又は役に立つ討論の一部について要約記録を作成する。30～50ページの完全な逐語記録に対し、要約記録はたった15～30ページですむ。これは関連性のない会話を除去したフォーカスグループの圧縮版である。研究目的を完全に理解している人だけが、要約記録を展開することができる。研究目的に完全に一致しているものだけ、要約記録として作成できる会話は、研究や調査にあっていない。無関係、または、余分なものに思われ

るかもしれない。また、議事録の作成に似ている。この要約記録は調査チームのメンバーが行わなければならない。

ノートを基礎にする

ノートを基礎にする分析は、主としてフィールドノートに頼っている。フォーカスグループもまた、オーディオやビデオで記録し続けられるかもしれない。しかし、これらの資源は、予備としてか、記録をはっきりする必要があるときのみに使われる。

ノートを基礎にした分析の大きな利点は早さである。ノートを基礎にする分析の特色は、助手の司会者の重要点把握能力が直接関係している。反対に司会者のノートは、討論に全力を注ぐ必要があるため、大雑把で不完全である。司会者は時々助手の司会者のノートを参考に分析を行うので、ノート記録には一貫性が必要である。全てのケースにおいて、ノートには人が直接引用した場合か、ノートテイクが参加者のコメントを分かりやすく言い換えている場合かを明記すべきである。

記憶を基礎にする

記憶を基礎にした分析は、専門的な司会者に任すべきである。多くの技術や経験を要求され、初心者には任すと、間違いを起こしやすい。このタイプの分析は、定期的に専門的な司会者によってマジックミラーつきの特別なフォーカスグループの部屋で用いられる。フォーカスグループ後に、司会者は別室に立ち寄り、明確なポイントの記憶を基にした要約を提出する。司会者はメモを作成しているだろうが、要約は主として記憶からなる。

このタイプの分析は、既存の商品と成功の可能性のある商品とどちらが良いかのような結果がむしろ明確な場合、間違いなく役に立つ。この方法は、フォーカスグループ質問が具体的な場合、コーディネーターが個々の参加者に回答をもとめる場合、司会者がフリップチャートを利用した時、キーポイントを捉えるためにノートに詳述する時に有効である。

報告は口述であり、フォーカスグループを見ていたスポンサーからの意見や質問の時間を取っておく。専門的な司会者は、根拠の無い結末や、スポンサーの主

観によって作られた解釈等、取り除く必要があるものを探す。スポンサーは潜在的に自分の信念を支持する意見を求める傾向があり、司会者の分析の役割はバランスの取れた視点で、このような落とし穴に陥るのを避けるように指導することである。

5. 分析戦略

分析の方法は人々が行き詰まる点である。彼らは逐語記録、テープ、ノートの全てを使ってどうしたらよいのか迷う。分析方法は困惑させられる点である。分析の開始の際に「長テーブル法」を使うことを提案する。これは昔から使われている伝統的な方法で、分析を処理しやすい量に細分する過程である。

長テーブル法

長テーブル法は、無数の分析案の中から使われ続けている単純技術のできる分析方法である。分析者がテーマを特定し、分類できる方法である。それは上品で洗練されたようには見えないが、有効である。準備は以下の通りである。

- ・作業を広げた状態で、分析している間邪魔されないでいられる部屋。さらに、長テーブルがあると役立つ。たくさんの床スペースで、かがんで作業するのが嫌でなければ、テーブルはなくとも良いし、子どもや犬を入れないようにする。壁作業もまた、ものをテープで貼るのが嫌でなければ可以的。
- ・逐語記録
- ・鋏
- ・カラーマーカーペン
- ・逐語記録をコピーした色紙
- ・フィリップチャートか新聞紙

逐語記録をバラバラに切ってしまうのは、その引用句が当初どこにあったのかが分からなくなってしまう。記録を細かく切ってしまった後に、この引用句がどこにあったのかということを見極める助言を以下に示す。

助言1：それぞれの逐語記録に番号をつけなさい。多くのワードソフトには、その機能がある。行番号は、あなたが逐語記録内で引用する箇所をすばやく見つ

けるために役立つ。

助言 2：違う色で逐語記録を印刷しなさい。参加者のタイプ・カテゴリー等によって逐語記録を色付けし、コード化する（例：学生のグループは青、親のグループが緑など）。または、左余白に青のラインを引いてある箇所は学生たちのグループ、左余白に緑のラインが引いてある箇所は親のグループとする。または、あなたがより細かく分類したいならば、最初のグループが青 1 本のライン、2 番目が 2 本青ライン、3 番目は 3 本青ラインとすればよい。この方法は、学生と親のグループといった見分けはつかないとしても、学生グループの見分けは可能である。この方法は、あなたが逐語記録をバラバラに切った後に、どこから引用したかを知るのに役に立つ。

それぞれの逐語記録を 2 部プリントしなさい。1 つは切り抜くため（加工用逐語記録）、もう 1 つは手をつけず保存しておく。逐語記録をあなたのファイルに保存しておきなさい。逐語記録を順番付けて並べる。それは、実践したグループの順番によって付けるか、もっとも適当なのは「参加者の特性」や「参加者の人口統計上の分類」で順番付けることもできる。たとえば、あなたが学生グループ、親のグループ、教員のグループを 3 グループずつ実施する場合、次の属性に入る前に、1 つの属性（例：学生）に関する種類の逐語記録を 3 グループ分作成する。これは、参加者のグループの 1 つのタイプから、他のグループに起こるだろう変化に注意を喚起することに役立つ。切る前に、逐語記録に全て目を通しなさい。速読によって、全ての範囲を思い出させ、グループでの発言の記憶を呼び起こす。

フリップチャートや新聞紙を長テーブルか床、壁に貼り付けなさい。新聞紙切抜きの各ページの上に、分析されるフォーカスグループの各質問を書きなさい。分析について 10 の質問があったなら、今、あなたの周囲に新聞が 10 枚あることになる。また、フォーカスグループ参加者の異なったタイプについて分類したいかもしれない。例えば、学生によるフォーカスグループからのコメント、親によるフォーカスグループからのコメント、そして、教師によるフォーカスグループからのコメントをページの一部分に貼り付ける。

さて、切り抜きと分類を始めます。各引用句を読み、解答しなさい。

ポイント1：参加者は尋ねられた質問に答えている。

- 「はい」なら、ポイント3へ
- 「わからない」なら、後ほどとりあげる
- 「いいえ」なら、ポイント2へ

いくつかの答えが漠然としていたり不明瞭ならば、コメントを取っておき後でとりあげる。

ポイント2：コメントはフォーカスグループでの各質問に答えている。

- 「はい」なら、適切な質問の場所に貼る
- 「いいえ」なら、ポイント3へ

注意：答えが質問に沿っていると推測しないようにする。時々、参加者は前の質問や質問をまだしていないのに答えを用意する場合がある。これが起こるようなら適切な場所に質問を移す。

ポイント3：コメントはトピックについて何か重要なことを言っている。

- 「はい」なら、適切な質問の下にある新聞紙にテープで貼る
- 「いいえ」なら、脇にとっておく

助言：たくさんのテープは使わない。後で引用句を移動させることがあるからである。

ポイント4：それは前に言っている何かに似ている。

- 「はい」なら、類似の引用文と一緒にしてグループ化し、基本的に同類のものを集める
- 「いいえ」なら、別にしておく

常に比較したり、決定をしなければならない。これはほかのものと似ているのか、あるいは異なっているのか。まもなく新聞紙は、参加者の引用文でいっぱいになる。すべての引用文が、きちんとカテゴリー内に収まる必要はない。フォーカスグループでは、参加者は一般にテーマからそれたり、研究にとってあまり重要でない側面を詳細に掘り下げたりする。その情報を利用しないで、混乱を解決

するために他に置くが、捨ててはいけない。代わりに、保管場所を作ることで、後に再びそれらの引用文を見直すことができる。あなたはカテゴリーを整理したり、新しいカテゴリーを作ったり、新しいカテゴリーに当てはまるかどうかを見分けるために未利用の引用文を再考する。未利用の引用文の保管場所は、部屋の真ん中の箱がよい。

全ての逐語記録の切り抜きを終えた後、各質問の分析の準備を始める。そして似ている引用文を全て一緒にすることを忘れないように。あなたが納得いくまで、整理しなさい。あなたは誰かに正確に分類するためにどのようにすればいいかを相談しても良い。あるいはそれらを見せても良い。カテゴリーに引用文を張り終えた時、次のステップの準備をする。

各新聞紙に戻り、質問に返答したグループの各タイプの要約を書きなさい。質問に答えた学生の要約を書きなさい。それから親と教師のコメントの要約を書きなさい。そして再び、比較対照する。かれらはどのように似ているのか。どのように違うのか。何が語られたか記述しなさい。後に先に進むにしたがって、意味を理解し、助言や内容を分析する。このプロセスの間、コメントやテーマについて、どれくらい重要性があるのか、重点を置くかどうか決める必要があるだろう。そのときの重要な要素を以下に挙げる。

頻度：私たちはある事柄がどれくらいの頻度で話されているかに注意し、最も頻度が高く話されたことが重要だろうと思ひ込むといった大きな誤解がある。本当に重要なことが、一連のグループでたった一度だけしか話されない場合があるかもしれない。あなたは、それが話されたときを見分ける研究をしているということを知っておかなければならない。

特徴：特に、私たちは特徴のあるコメントに重点をおく。例えば、人々が飛行機で嫌なことを尋ねているとする。私たちは、人々がカバンを失ったときのことを話すと、飛行中に何が嫌だったかよりカバンを失ったほうに注目する。例えば、「飛行機に乗ったときスーツケースを紛失するのが嫌だわ」というコメントなどである。

感情：私たちは特に参加者が彼らの答えの中で感情、熱情、激情、又は熱烈さを見せたテーマやコメントに重要性をより多く感じる。

広範囲さ：頻度と広範囲さは関連しているが違っている。広範囲さは異なった人々

がどれくらい（同じ）ことを言ったかである。頻度は同じことを何回言ったかである。一人が同じテーマに答え続けたことがあった。たとえ、テーマがかなり多く言及されていても、たった一人によって提起されたものであれば、気をつける。広範囲さには注意を払う。

各質問について述べたことの要約を書いているとき、テーマが質問と食い違っていることを見るために、全質問を見渡す。繰り返し提起されていることは何か。もしそうならば、質問よりもむしろテーマについてレポートを組み立て直したほうが良い。おそらくいくつかの質問は結合することができる。

少し休憩を取るのが良い。例えば、1～2日間データから離れなさい。これは全体の流れを把握しなおすのに良い機会である。何が研究を促進するか。だれが結果を利用し、役立てられる情報を位置づけたか。参加者が話したことを最も良く伝達するために、この情報をどのように組み立てればいいのか。あまり重要でないが面白い話によって脱線することはよくある。数日後、分析を結論付ける。

報告書を書くときは、全質問やテーマについて全体像を見る。それから、先に話されたことの要約を使用する。もし物語調の報告書ならば、発言内容を顕著に示す引用文を選ぶ。引用文は証拠として利用される。私たちは、発言の本質を捉えている引用文を探す。それを読めば、読み手は参加者がどのように話したのか理解しやすい。一般的に各カテゴリーやテーマごとに3つの引用文を用いる。この段階の分析を完成させ、そのあと、説明や提案に進む。しかしながら、この段階では、発見したことと明らかになったことを区別する。なぜならば、発見された部分とは、過程を要約したものを通して作成したにすぎないからである。

長テーブル分析法は、長い間使用されてきたが、今なお有効である。多くのやり方があるが、必須要素は基本的に切って、分類して、比較対照し整理することである。初めて質的研究を行う人にこのプロセスを利用することを提案する。これは体系的である。この作業はまとまりごとに小分けして分配できる。分析を目に見えるプロセスにすることに役立つ。一度、分析におけるこの方法を覚えたら、ほかの調査において必要性に応じてどのように過程に適応させるかのより良いアイデアが浮かぶ。

データ管理を助けるためにコンピューターを利用する

コンピューターはフォーカスグループ分析のさまざまな方法で利用されている。多くの方法があると思うが、主に3つの方法がある。

第1の分析法は、切り貼りするという方法と同様に、単にワープロを使う方法である。基本的に長テーブル分析法を実施するためにコンピューターを使う。各引用文の出拠を追跡する必要があると考える場合、引用文どうしてまとめやすいが、それらがどこから引用したのかを見失う。出拠を知ることが不可欠である。これは、グループまたは参加者の各引用文を、明らかにすることができるコード化の方法を開発することによって解決される。

第2はワープロの切り貼り作業以外に、引用文をコード化することである。多数の調査者は分類、コード化、マクロの使用法を生み出している。基本的に彼らはすでに結果の分析のために使っているコンピューターのソフトウェアの機能を使用する。この方法は分析専用ソフトウェアのように洗練されたものではないかもしれないが、調査者はすでにこのソフトウェアに精通しているので役に立つ。

第3は質的分析のために設計された専門的に開発されたソフトウェアを使うことである。2つの人気のあるプログラムは、ザ・エスノグラフとNUD*ISTである。これらのプログラムは他の戦略が妥当でない分析に可能性の扉を開いた。例えば、このプログラムは、コードを「巢」とすることが可能である。これは、長めの引用文の中に短めの引用文があり、そして、それぞれは違うものとしてコード化することができることを意味している。前述2の方法では、引用文をどこに位置するかを制限しがちであるが、このコンピュータプログラムにおいて制限は無い。また、あなたがコンピューターでコード化している、人口統計学的特性をもった参加者からのコメントを検討したいとする。それは他の分析方法によっても行えるが、難しく厄介である。この専門的に開発されたコンピュータプログラムの利点は、膨大なデータの管理を助けるということである。これは、分析者がデータをより注意深く見ることを助ける。結果として、これらのプログラムは大学院の学術的な調査において一般的である。欠点はプログラムを習得し、操作するために必要な時間が長いことである。また、この方法は必ずしも必要ではない分析のレベルをも行う。

迅速なアプローチ

時々、速度は重大な関心事となる。おそらく、決定には迅速な結果が必要である。速度があまりにも重視されるときは注意をする。速度が重要なときは、専門の司会者は以下のような様々な戦略を使用する。

- ・研究の焦点に焦点を合わせる
- ・速い分析を促進するための質問を注意深く開発する
- ・普通の質問より少なく質問をする
- ・発言を理解するためにフリップチャートを利用する
- ・グループの終了時に全体の要約を口頭でする
- ・助手の司会者を活用する

録音による分析

これは、フォーカスグループをデジタル録音できるソフトウェアと装置を使用し可能になる新しいアプローチである。専門のソフトウェア（例：Sound Forge）を利用して、司会者はラップトップ型のコンピューターに音を記録し、後に分析者が識別できるように印をする。調査者は、すぐに記録に戻り、マーカの印を探し、実際の引用文を確認し、引用文を再生する。そうすれば引用文を整理でき、CDに用意されたレポートの実際のコメントを保存する。Pirre Belisle *Quirk's Marketing Research Review*, Quirk Enterprises, inc. (1998, P.18) を参照。

6. 考慮すべき助言

追求を一旦止めてみる。近い将来、一連のフォーカスグループを分析しなければならないでしょう。私たちが提案できる最も価値あるアドバイスは何だろう。以下のことを提案する。

調査環境に何が必要なのか知る

フォーカスグループ調査の方法は様々で、ある分析方法はまったくあなたの調査に適しないかもしれない。これまで、どのように分析がなされたかを知りなさい。初めてフォーカスグループを分析するならば、各調査がどのように実施され

たか、仲間からのアドバイスを求めなさい。学術論文の分析は、小額の資本金から成る非営利団体といった小規模な分析とは全く異なる。

フォーカスグループに出席することが最善

フォーカスグループに参加することに優るものはない。フォーカスグループが実施されているとき、部屋の中にいる参加者の誰かによって分析されることは、大きな励みである。80%の要素は記録から見出され、残りの20%は部屋で起きた記録に無いことであると考えられる。あるグループにとって環境とは、そこで感じ察知したことに違いない。

全てのことが分析する価値があるとは限らないし、分析可能とは限らない

分析初心者、しばしば全てのデータを利用しなければならないと決め込むことで間違いを犯す。あるフォーカスグループではあまり価値のない話し合いがほとんどだったが、ほかのグループでのコメントは、豊富で、洞察に満ちていることもある。必ずしもある質問が他のものより重要だとは限らない。より重要な話がされているグループの話し合いの部分に注意を向けなさい。

分析はパターンを特定することに基づく

ある小学校の教諭が分類システムを教える方法は興味深い。その教諭は大きな箱にいっぱいの鍵を持ち出し、教室の真ん中にざっとひろげた。教師は学生に鍵をきちんと並べるように言った。学生はどのようにすればできるのか質問した。教諭はいくつかの方法でできるが、よく考えて、カテゴリー別に鍵を置かなければならないと言った。子どもたちは熱中して課題に打ち込み、可能性を論議し、戦略を比較し、何度も方向性を変えて、そして最後には、提起された方法について一致するに至った。時々子どもたちはある方法を断念し、違った方法を試した。それは常に興味のある課題であった。ある子どもたちは色や金属（真鍮、鉄、ニッケル）によって分類し、他の子どもは大きさ（小、中、大）によって分類するだろう。また他の子どもはタイプ（自動車、家、南京錠、靴の鍵）によって分類するだろう。悪い方法というものはない。しばらくして、ある学生は分類システムの目的について尋ねるだろう（これが教えられる瞬間！）。今後使うために鍵を

きちんと並べるのか、美しく展示するため、等と質問する。私たちが分類する方法は、目的によって決定される。

同様の方法で、フォーカスグループ調査者は目的を反映させるカテゴリーを考えなければならない。これらのカテゴリーはしばしば研究目的によって決められる。

話題についての先入観や固定観念に注意する

どのように分析するかは、人によって異なる。ある人は、発見したことからヒントを得て、そのヒントに基づく証拠を見つけ、結論に飛躍する。時々、その結論は時期尚早の場合がある。いつも飛躍する前に自分自身で試してみなさい。反対の証拠や逆の情報を述べている証拠を探しなさい。特に異なる背景を持つ研究仲間の意見を求めなさい。解釈と採用した選択肢を再度考え、あきらめる準備をみなさい。先入観は時に役立つが、危険をもたらすこともある。多様な実態があることを認めなさい。

参加者の代表の声である

研究者自身が参加者の解説者や代弁者とみなしなさい。研究者の仕事は、参加者が話題についてどのように感じているかを明瞭に伝えることである。1つの方法は、かれらのスポークスマンになることである。提供される必要のある異なった声や多様な視点があるだろうし、様々な声を整理し、明確に示すことである。

現実を図示する

あなたの発見したことを図示することを考えてみる。フローチャートやマトリックス、図形、などは、結果を描写するのに役立つ。また、略図、絵、イメージ、推論、漫画なども役立つ。アンセルム・ストラウス（1988）は、質的分析を行う学生が役立つ視覚化技術を用いる。視覚表示は、分析を形作る時と後に結果を伝える時との両方で役に立つ。

回数を重視しない

私たちは頻度に注意を払うが、回数を単に合計するのではない。めったに報告書に回数を入れない。回数はフォーカスグループの報告書を誤解させる。リーダー

はしばしば回数をパーセンテージに変えて人数を推測する。これはおろかなことである。サンプル数は小さすぎる。すべての人がすべての質問に答えるわけではない。いくらかの人々は1つの質問に3回コメントするかもしれない。他の者はすべての質問についてコメントしないかもしれない。代わりに、「誰もいない」、「少しだけ」、「いくらか」、「多くの」、「ほとんど」、「すべて」と言うように、どれくらいの人々が問題について話したかを詳細な方法で描写するために使うこともできる。

要約

フォーカスグループ分析は慎重で目的のある過程である。体系的で、実証できる手順を使い、一連の手法で行われ、継続する過程である。多くの分析戦略が使われることがあるが、それぞれ質的な情報に注意を払う。記録、テープ、ノートは分析の基礎として使われる。分析を具体的にするために「長テーブル法」を試みることを薦める。コンピューターもまた役に立つことがある。近い将来にフォーカスグループ分析を行う人のため、私たちはもっと扱いやすい作業にするよういくつかの助言を提案する。

実践のヒント6の1

フォーカスグループを記録する

フォーカスグループインタビューを記録する

以下は、フォーカスグループインタビューの記録する際のいくつかの注意点である。

1. 司会者の言葉を明確にする。いつも司会者の意見を明確にしない。太字、大文字、アンダーラインのような首尾一貫した様式を用いる。
2. 首尾一貫した様式を用いる。全てのコメントは行間をあけず打つ。発言者の間は、1行あけて打つ。全てのページに番号をふる。全てのページのヘッダーに日付やグループ名を記載する。
3. 句読点を心配しなくてよい。人は文章を完全には話さない。文として意味を成すように見えるところは句読点を用いなさい。文章の終わりには、ピリオドをつけなさい。誤字の確認をしなさい。依頼者と共に、専門用語の綴りや業界用語、頭文字などを確認しなさい。内部のみで使用される言葉は心配する必要はない。その他は正しく書くこと。
4. うーん「umms」えーと「ahs」などのような言葉は省く。
5. コメントを逐語的に打ちなさい。フォーカスグループの記録は逐語記録であり、議事録ではない。会話は逐語的に記録される。言葉や文法を変えてはいけない。もし分りにくい言葉があれば、その時は3つのピリオド（・・・）を打ちなさい。それは逐語記録から聞き落とした言葉であることを示すためである。
6. 例外的で非日常的な言葉に注意しておく。笑い、大声、怒鳴り声、誰かの割り込みなどには括弧で囲んで示す。
7. 十分な時間をかける。一般的に1時間のテープをおこすのに4～8時間かかる。しかし時間は、タイピストの速さや録音テープの質、文章の長さ、フォーカスグループのタイピストの経験、話題の複雑さによって変わる。
8. 音のいい録音・再生機器を用いなさい。タイピストはスピーカーが小さく、扱いにくいボタンのテープレコーダーは避けなければならない。イヤホンを使うと良い。フォーカスグループインタビューはいつも後ろに騒音があり、参加者は違うトーンや声の大きさで話す。ゆえに質の良い録音・再生機器を使い、十分配慮しなければならない。もし可能であるならば、テープの再生や巻き戻しのスピードを調整でき、足で操作できる装置がよい。
9. 中断は最小限にしなさい。気を散らすことや邪魔を最低限にし逐語記録を打ちなさい。
10. 逐語記録をする前に調査者に質問。これは、フォーカスグループを誰かが文章化するまえに明確にしなければならないいくつかの点である。

(a) 調査者は予備のテープを用意しているか

- (b) 紹介の部分は記録すべきか
- (c) フォーカスグループのあと記録のための反省会を実施すべきか
- (d) グループから特別参加者の関心事が見出されたか
- (e) テープには録音されていないが、公式なグループの一部である会話はどうか
- (f) 参加者の名前を明らかにするべきか（テープおこし担当に座席表あたる）
- (g) 録音に関して技術的な問題があるなら、テープおこし担当がすべきことは何か指示を求める。逐語記録のなかに問題を書き留めて、そして記録し続けるか、その他
- (h) 不意に、声が聞こえにくくなったり殆ど聞こえなくなったときどうするか
- (i) 数人が一度に話したときどうするか
- (j) クライアントはどのタイプの記録を望んでいるか
紙でのプリントアウトか、データのコピーか、メールか
ワープロのソフトプログラムの種類は何を使っているか
- (k) 完成あるいはそれぞれ別に記録を受け取りたいか

記録係と契約する

記録係（テープおこし担当者）と契約することは難しいかもしれない。テープおこし担当者にとっては、グループの特徴や録音の質が異なるので、時間ベースで契約するのが良い。いくつかのテープは他のものより多くの時間がかかる。調査者にとって、記録にかかる全費用を知ることなしに予算をきめることは難しい。テープおこしにかかる速さと質が担当者によって異なるかもしれない。調査者は1本のテープ当たりの料金を計算しなければならない。コストや正確さのレベルを決めるためのテストとして、最初の録音を使うとよい。

記録の簡便化

まもなく、コンピューターの音声認識ソフト開発によって分析は大きな打開策をみるであろう。音声認識ソフトはあなたかコンピューターに話しかけることを認知して、コンピューターがあなたの言っていることを直ちに記録する（それは30年前、あなたが見ていたであろう「Star Trek」で、スコッティがコンピューターの前にやってきて、質問をして答えを得るというようなことである）。違う声や発言者の声を正しく認識できるプログラムが開発できれば、その打開策は見出されるだろう。現在、これらのプログラムはあなたの声、誰かが話している声、意味のないように思える話を見分けるように「訓練される」必要がある。そうすれば、私たちは即座に同時記録が可能になる。